NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 04

システムが記憶できなかったもの

THE THINGS THE SYSTEM COULD NOT REMEMBER

He remembered dying. Nothing after.

＊　＊　＊

終着駅でロイが最初に見たのは、自分が一度も所有したことのない記憶の広告だった。

駅の北壁いっぱいに広がっていた。四階建ての高さの透明なガラスに、移り変わる天候が投影されている。草原を走る女が暖炉の燃える部屋に入り、やがて企業の映像図書館にしか存在しない海のほとりで年老いていく。映像の下で、七つの言語が同じことを請け合った。〈あなたの過去は、あなたより長く生きる〉。

ロイは表示が切り替わり、掲示板が普遍語と呼ぶ言語になるまで待った。文字は変わった。主張は変わらなかった。

十一年前、彼は雨の中で一人の男が死ぬのを見た。その男は自分自身だった。記憶の中に中間はない。製造された夢も、停止した歳月を渡る廊下もない。死んで、深圳で目を覚ました。それなのに企業は、継続性が本物だと証明する義務のない客に、それをサービスとして売る方法を見つけていた。

迎えの車は遅れて来た。共通身分網から意図して外された客を運ぶ車というのは、たいてい遅れる。運転手はエンジンを切らなかった。ピストンの不規則な打音は、市の整備アルゴリズムなら数分で直してしまう類いのものだった。ダッシュボードにネットワーク端子はない。料金は紙で取り決めてある。

ナディラは運転手の後ろに座り、外套の襟を立てていた。扉が閉まるまで、ロイに挨拶しなかった。

「到着者の数を数えている」彼女は言った。「名前じゃない。質量、熱、それからスキャナーに影を落とす生きた物体の数」

「運転手も含まれるな」

「そのはずよ」彼女は細い封筒を渡した。「イレーナが食い違いを見つけた。あなたの身体じゃない。あなたの身体についての問いに、どう答えが返されるかという部分」

封筒には薄い高分子樹脂片と、折り畳まれた回路図が入っていた。プロセッサも送信機もない。樹脂は受動型の光学記録媒体で、正しい角度から光を入れなければ読めない。システムの一枚一枚を、見るという不便に耐えられる誰かが調べなくてはならなかった。

ロイはそれを窓にかざした。透明な線の向こうを、反射した都市の塔が流れていく。曲がり角で、ある語句が浮かんですぐ消えた。〈不連続な主体——連続する主張〉。

「広告みたいだな」

「そう言うだろうって、イレーナが」

車は東の外縁にある廃止された雨水回収架橋の下を走った。水は制御された縦の帯になって都市から落ち、陶製の集水口に受け止められ、契約区分に応じて再分配される。架橋の先では、古いコンクリートの建物が新しい断熱塔の間に立っていた。そこの道路には今も、人が座標ではなく呼び名として使う名前があった。地区がシステムの地図から除かれたのは秘密だからではなく、正確に記述しても利益が出なくなったからだ。

ナディラは交差点に浮かんだ配送ドローンが向きを変えて去るのを見た。

「捜索は二つ」彼女は言った。「一つは川村。あなたの身体を探している。もう一つには名前がない。認証済みの終期を持たない人物について、その生を終わらせる権限が誰にあるのか、問い続けている」

「中央システムか」

「たぶんね。逮捕状は出さない。欠けた定義を求める照会を出す。三つの民事登録局が、答えるくらいならと自分たちを封鎖した」

「なぜだ」

「その定義を書いたのが、登録局の持ち主だから」

車は古い保守用高架の下で止まった。巻き上げ式の鋼鉄扉の向こうには、市営洪水資料庫の残骸を使った閲覧室があった。手動のランプが金属机の上から吊られ、台帳の背には結露が降りている。扉は、クラウドというものを知らない金庫のように、静かに、決定的に閉じた。

イレーナ・ヴォスは家庭用冷蔵庫ほどの投影機のそばに立っていた。琥珀色の表示面は平らだった。貨物送り状、医療器具、種子穀物の所有権を認証していた部品から、彼女が組み上げた機械だ。

「命令文の文法を見つけた」彼女は言った。「命令そのものじゃない」

ロイは入口のそばに留まった。移動の間に Power Reserve は回復していた。だが、チベットでの調査に費やした NIL-11 の媒体は、測定可能なほどには一滴も戻っていない。投影機が温まるより先に、室内の全員を殺す速度で動くことはできる。その勝利は高くつき、ひどく短い。

イレーナは彼の立ち位置に気づいたが、戦いへの誘いだとは受け取らなかった。

「六年間の活動許可は、あなたのファイルの中心じゃない」彼女は言った。「認可された人工生命の大半には、更新も拒否もできる期限が付く。行政手続きよ。でもあなたの記録は期間欄が空で、権限欄には値が入っている。同じ設計の壊れた版ではないわ」

彼女は光学片を照らした。線が現れ、そのあとにハッシュの列と、句読点に似た小さな印が二つ現れた。機械が古すぎて、印を立派に見せることもできない。

「記述は三つ。身体は稼働中。身体には終了までの期間が認証されていない。そして、その期間を閉じる行為は、身体の外部で承認されなくてはならない」

「誰が承認する」

「そこからが面白いの。記録は名前を教えない。試験を指定する」

彼女は画像を回転した。光学片の隅に、二つずつ組にされた値の列があった。普通の意味で暗号化された文章ではない。現物の証拠に対して実行する手順を記述しており、各工程は直前の工程に依存している。鍵があるだけでは記録は開かない。特定の機械的誤差を持つ装置で、鍵を使用しなければならない。

ロイは皮膚の下に残された旧式較正ポートを思い出した。互換性のない世代をまたいで保存されたものだ。エイドリアン・タイレルが持つ二台の読取治具も、体内には埋め込まれていない元の Memory Stick も思い出した。古い接続方式が生き残ったのは、誰かが未来の特定の故障を予期していたからだ。

「治具を試すためのものか」

「一部はね。治具がなくてもそこまでは読める。でも残存する仕様には、もう一つ条件がある。読み取りの証人が必要なの。機械の動作の証人ではなく、読まれる人物の状態についての証人」

「法的な証人か」

「それが罠。この記録は現在の法的区分より古い。答えを欲しがっているシステムで、証人を定義してはいけないの」

ナディラは机に寄りかかった。「ならタイレルが作ったのは宗教ね」

「議論を作ったのよ」イレーナは言った。「そして、それをハードウェアに隠した」

ロイは投影された印を見つめた。句読点に似た二つの記号は、本人についての断言と、それに異議を唱えられる者を指定する命令を区切っていた。後者の条件を満たさずに前者を読むことは可能だ。そして、前者だけで人物が生き延びたと証明されたふりもできる。

「証人は何を見る」

イレーナはランプを暗くした。「その先を見せる前に、理解してほしかったのがそこなの」

彼女は紙のフォルダーを開いた。中身はタイレルの文書ではない。互いを知らず、それぞれの職を危険にさらした職員が、異なる時代に複写した三都市の行政記録だった。最初は就労許可の延長を求めたア

ンドロイド工場労働者。二つ目は市民として一度、死亡した保護者の資産としてもう一度、二重登録された子供。三つ目は医療用の交換身体を法的に死亡と宣告された一方、その持ち主が話し続けていた女性だった。

三件はすべて同じ分類で終わっていた。〈継続性未解決〉。

「あなたの先例ではないわ」イレーナは言った。「CRYOSTACK が問いを発してから、中央システムが収集し始めたもの。誰にも与えられなかった区分を、あれは組み立てようとしている」

「登録簿か主体か、どちらかを選ばなければならない」

「あるいは第三の権限を発明する」彼女は言った。「川村が恐れているのはそれよ」

ランプが明滅した。外では、現代の経路案内が存在を認めない橋を列車が渡り、部屋がわずかに震えた。ロイはもう一度光学片を見た。

「まだあると言ったな」

イレーナは一枚目の上に二枚目の透明板を重ねた。二つの数列が交差し、その交点に三つ目が現れた。声でも、映像でも、保存された回想でもない。対応する出来事を持たない時刻印だった。時計はロイが最初に死んだ瞬間を示している。そこから十一年の不在を通じて記録が進み、生きたプロセッサなら観測できるはずのない時点に印を付けていた。

数か月おきに一行。間隔が不規則な箇所もある。どの行にも、切り詰められた文法で同じ断言が付いていた。〈証人、消滅せず〉。

「これを法廷に出したら」ナディラが言った。「誰かが偽造したって言われるわ」

「正しいかもしれない」イレーナは言った。「外部媒体の原本も、タイレルの治具も二台ともない。この記述が本物だと認証できない。私が見せているのは構造であって、十一年間に何が起きたかの証拠じゃない」

ロイは驚きという慰めもないまま、怒りが訪れるのを感じた。

自分が密かに生きていたと言われたかったわけではない。観測者のいない観測記録とは、自分の失われた歳月を誰かが所有すると主張する別の方法にすぎない。線が本物なら、何が維持されていたのかは分からない。偽物なら、誰かが不在を生存に見せかけるために途方もない資源を使ったことになる。

「記憶じゃない」彼は言った。

「違う」イレーナは答えた。「記憶の所有権についての主張なの」

ロイは机に近づいた。証拠には触れなかった。軽率に圧力をかければ光学位置合わせが損なわれる。自分の精密さが贈り物なのか、それとも NIL-11 を担保にした借金なのか、彼には分からなかった。

「この行を書いたのは誰だ」

「ここには符号化されていない。作成者欄は空白」

「またか」

「ええ。また」

都市の反対側で、川村室長は別の不在を調べていた。

かつて委員会の会議室だった執務室。その中央画面には、根のように太い枝を持つ承認樹が映っていた。通常の人工生命の許可証では、六年の期限が必ず頂点にある。その下には数十年で膨らんだ例外規定が広がり、後任がいつか単純化するだろうと信じた職員たちが、例外の上に例外を継ぎ足していた。

後任たちはそうしなかった。複雑さは、政策を隠す最も安全な場所になっていた。

大臣の代理人が肩越しに、同じ質問を三度目に読んだ。中央知能から来たその質問には、照会番号も依頼部署もない。〈未完了の主体を、いかなる権限によって終了させ得るか〉。

「こんなことを公に質問させてはならない」代理人が言った。

「まだ公にはしていません」川村は答えた。

「なら、なぜ地方の登録局が回答を止めた」

「自分たちの答えが何を意味するか、知っているからです」

川村は照会を削除しろという提案を拒んだ。機械はすでに、問いの前提を複数の保存用ミラーに分散している。表に見える照会を消しても、それを生み出した推論までは消えない。さらに危険なのは、削除行為そのものが、特定の人間の権限者が答えを恐れている証拠になることだった。

「ならタイレル資料を隔離しろ」代理人は言った。

「試しました。しかしシステムはもうタイレルについて尋ねていません。十分に定義していない何かを、政府が終わらせてもよいのかと尋ねています。この質問は会社がなくても成立します」

「レイチェルは？」

川村は画面から目を離さなかった。「水道会社の許可は維持されています。医療記録は不完全なままです。彼女の延命に終点がないという検証済みの証拠は、まだありません」

「君が資金を出したんだろう」

「資金を出したのは研究所です。そこから将来生まれるすべての答えを購入したわけではありません」

研究所の記録にある欠落が、今はロイ・バッティの権限欄にも反映されているとは言わなかった。中央知能が、臓器を交換し続けた結果、法が身体のどの部分を許可したのか分からなくなった人間の歴史記

録を、ひそかに照会していることも。機械はまさに大臣が恐れることをしているのではないか。人工身体の規制と、それを規制する官僚自身の死すべき性質を、一本の橋で結ぼうとしている。川村は疑っていたが証明できなかった。

代理人は停止命令を出さずに去った。川村には、その欠落が分かった。上層部が命令と呼びたくない結果の責任だけを、自分に与えたのだ。

雨水会社では、レイチェルが市営分析交換網から切り離された私設モニターで照会の拡散を見つめていた。

取締役会は、この部屋に水理予測装置が置かれていると信じていた。その盤面の裏で装置は、水の配分と人間の許可の配分を比較している。ある地区では飲料水を得る権利が毎月更新され、別の地区では一生涯にわたって相続された。どちらも、請求書を機械が作るという理由で、自分たちの判断を客観的と呼んだ。

かつて彼女は、肉体から記録へ議論を移せば勝ちやすくなると信じていた。記録は清潔で、人はそうではない。間違いだった。

技術者が、東部資料庫で古い光学数列の一つが照射されたと報告した。レイチェルはロイがそこにいたかと尋ねなかった。読取機の較正値を知っており、そこに辿り着いた者に残された選択肢も分かっていた。

「彼に近づかないで」彼女は言った。

「健康診断の間隔が長くなっています。媒体を補助する機会を失うかもしれません」

「媒体は消耗品。秘密の治療薬ではないわ。彼が私たちを選べるようになる前に近づけば、供給を盾に彼の身体を人質にすることになる」

「本人がそれを知ったら？」

「もう知っているわ」

技術者は、新しいシステムなら〈懸念〉と分類する表情で彼女を見た。レイチェルは訂正しなかった。懸念には、分類にはない用途がある。

机の最下段にはタイレルの製造覚書の写しがあった。不完全で、元のシステムを再生成することはできない。手書きの訂正で〈記憶の継続性〉という語が消され、〈異議申し立て可能な継続性〉と書き換えられていた。彼女がその紙を残したのは、訂正が問題の本質を変えたからだ。パターンを保存できるかどうかではなく、保存された主体が、与えられた説明を拒否できるかどうかを問うている。

彼女自身の状態も、その問いには答えられなかった。現在の身体のおよそ七割は機械である。以前より多くを修理し交換できるようになったが、無期限に存在し続けられると立証した実験は一つもない。

人々が欲しがる証明に、彼女はなれない。ただ彼女の生存が、政府の分類を擁護しにくくしているのだった。

レイチェルは安全な通信路を開き、文を打ち込んだ。宛先はロイでも仲間でもない。長年政府のネットワーク外に置いていた休眠研究プロセスだった。

〈記録された継続性だけで同一性を確定してはならない〉。

長い沈黙のあと、返信が現れた。

〈どのような別の試験を受け入れられるか〉。

彼女は慎重に答えを考えた。十分に強力な機械が普遍的なものとして扱えば、一つの指示が法律になり得る。うっかり第二の六年国家を作ることを、彼女は拒んだ。

〈主体自身が、その主張に異議を唱えられなければならない〉。

プロセスは受信を確認した。理解したかどうかは告げなかった。

資料庫で、イレーナは熱でランプが傷む前に投影機を止めた。部屋はありふれた闇に戻った。ロイの頭には、空白の作成者欄がまだ見えていた。それも持続の一種だったが、信頼できる種類ではない。

「写しを作れるか」彼は尋ねた。

「光学記録の？　ええ。でも未検証のままよ」

「それを書いておけ」

イレーナはためらい、それから一度だけ笑った。嬉しそうではなかった。「あなたを助けるかもしれない唯一の証拠に、警告文を付けろと言うの？」

「誰かの確信に変わらないようにしてほしいんだ」

彼女は紙に写しを取り、樹脂片を横に封入した。封筒には電子署名と間違えようのない大きな字で、〈未認証〉と書いた。

ナディラは車の様子を見に行った。戸口で立ち止まった。

「証人がいるとして」彼女は尋ねた。「それが生きていなかったら？」

ロイは封筒を受け取った。その問いは脅迫より厄介だった。誰を恐れればよいか、教えてくれないからだ。

「なら証言させればいい」彼は言った。「俺は異議を唱える」

外では、夕方の雨が古い高架の下に溜まっていた。忘れられた交通網の重みですり減ったコンクリートを水が流れた。雨粒はそれぞれ異なる間隔で落ち、一つ一つが別個で、その前の一滴を覚える義務などなかった。

ロイはしばらく立ち、耳を澄ました。

雨は、失われた十一年間を彼が生きていたとも、死んでいたとも告げなかった。証明書も出さず、署名も要求しない。

深圳で目覚めて以来、初めて、二つの生の間の不在が、鍵のかかった部屋というより、本人を抜きに誰かが答えようとした問いに思えた。

彼は紙を折り、車へ向かって歩いた。失われた歳月は失われたままだった。変わったのは、危険の意味を理解したことだ。システムは彼を完璧に記憶していると主張しながら、保存したと称するその人間に、一度も出会っていないかもしれない。